

筑波大学附属坂戸高等学校

先進的な総合学科を活かした持続可能な アセアン社会を創るグローバル人材の育成

【構想の概要】

全生徒に対する地球市民性醸成プログラム（1年次グローバルライフ、カナダ海外校外学習）の開発と、アセアン諸国と連携した2年間に及ぶ課題研究プログラムの開発（2年次T-GAP（グループ）、高校生国際ESDシンポジウム、国際フィールドワーク；3年次卒業研究（個人）、大学における研究指導）を行う。また、コミュニケーション能力向上のための英語+1か国語マスタープログラム（インドネシア語 講座）も実施する。

【平成30年度入学生 総合学科 教育課程表】

1年次				2年次				3年次				
教科	科目	単位		教科	科目	単位		教科	科目	単位		
必修 学校指定必修	国語	国語総合	4	必修 学校指定必修	地歴	世界史A	2	必修 学校指定必修	保健体育	体育	3	
	地歴	日本史A	2		公民	現代社会	2		外国語	コミュニケーション英語Ⅲ	3	
	数学	数学Ⅰ	3		理科	物理基礎	2			卒業研究	2	
	理科	化学基礎	2		保健体育	体育	2	3年次必修科目数				3
		生物基礎	2			保健	1	3年次学校指定必修科目数				5
	保健体育	体育	2		芸術 (選択)	音楽Ⅰ		3年次選択科目数				21~22
	保健体育	保健	1			美術Ⅰ	2	3年次教科科目履修単位数				29~30
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3			書道Ⅰ		特別活動				1
	家庭	グローバルライフ	2		学校指定必修	外国語	コミュニケーション英語Ⅱ	4	3年次総履修単位数			
情報	社会と情報	2	2年次必修科目数				11					
学校指定必修	数学	数学A	2	2年次学校指定必修科目数				4				
	外国語	英語表現Ⅰ	2	2年次選択科目数				12				
	産業	産業社会と人間	2	2年次教科科目履修単位数				29				
1年次必修科目数			23	特別活動				1				
1年次学校指定必修科目数			6	総合的な学習の時間				2				
1年次教科科目履修単位数			29	2年次総履修単位数				32				
特別活動			1									
1年次総履修単位数			30									

2年次選択科目				
科目群	生物資源・環境科学	工学システム・情報科学	生活・人間科学	人文社会・コミュニケーション
科目群	<指定(4単位)> 農と環境Ⅰ(2) 生物資源・環境科学実習Ⅰ(2)	<指定(2単位)> 工学情報実習Ⅰ(2) <選択(2単位)> 産業電子技術(2) プログラミング技術A(2)	<選択(4単位)> 福祉入門(2) 生活と福祉(2) パフォーマンスコミュニケーション(2) 生活デザインⅠ(2)	<選択(4単位)> ことばと文化(2) 国際社会(2) 演習(4)
一般選択科目	現代文(2) 日本語表現(2) 古典Ⅰ(2)	世界遺産で学ぶ地理(2) 日本史B(4)	世界の思想(2) 数学Ⅱ(4) 数学B(2) 化学α(2)	原価計算(2)
	農業研究(4) 生活園芸(2) 製図(2)	アパレル入門(2) 調理科学(2)	子どもの発達と保育(2) 介護福祉基礎(2)	ビジネスの基礎(2)
	ビジネススキル(2) マーケティング(2)	体育を科学する(2) 生物α(2)	工業数理基礎(2) グローバルライフプラス(2)	P.S.(2)

3年次選択科目				
科目群	生物資源・環境科学	工学システム・情報科学	生活・人間科学	人文社会・コミュニケーション
科目群	<指定(5単位)> 農と環境Ⅱ(2) 生物資源・環境科学実習Ⅱ(3)	<指定(3単位)> 工学情報実習Ⅱ(3) <選択(2単位)> 機械設計(2) プログラミング技術B(2)	<指定(1単位)> 人間科学(1) <選択(4単位)> 生活実習技術(2) 介護総合演習(2) 生活デザインⅡ(4)	<指定(1単位)> ビジネスの今(1) <選択(4単位)> 会計(4) Practical English(2) 日本語・日本文化演習(2)
一般選択科目	現代文(2) 現代文演習(2) 言語コミュニケーション(2)	古典Ⅱ(2) 古典に学ぶ(2) 表現演習(2)	地理B(4) 世界史B(4) 現代の政治経済(2)	数学Ⅲ(5)
	数学活用(2) 物理(4) 化学β(2)	生物β①②(4) 地学基礎(2)	スポーツⅡ(2) 英語表現Ⅱ(4)	音楽Ⅱ(2) 美術Ⅱ(2)
	野生生物入門(2) 農をよむ(2)	エネルギー・資源と環境(2)	食と農の科学(2) ICTハードウェア(2)	めくろデザイン(2) システムデザイン(2)
	子ども文化(2) 服飾文化(2)	食文化(2) 福祉からみた生活(2)	生活研究(2) 販売実践(4)	くらしのナーと法律(2) 商業デザイン(2)
	ビジネスコミュニケーション(2)	マルチメディア(2)	比較文化論(2)	Global Studies(2)
	ワールドビジネス(2)	Discussion & Debate(2)		

※SGクラス1年次は、「グローバルパスポート」が必修

※上記以外に、時間外選択科目として「インドネシア語(1)」「国際フィールドワーク入門(2)」「国際フィールドワーク(2)」を開講

総合学科 20 年の経験を生かしたカリキュラム

総合学科日本初発校のひとつである本校は、すでに 20 年以上の課題研究（校内科目名：卒業研究）活動を実践してきた。このため、本校における SGH のカリキュラム開発は、総合学科 20 年に及ぶ実践をベースに、グローバル社会へ対応していくための開発を行ってきた。

具体的には、入試段階で「SG 入試」を実施し、1 学年 4 クラスのうち 1 クラスを「SG クラス」とし、SGH プログラムに中心的に取り組むこととした。ついで、1 年生では入学者全員がグローバルイシューに対する当事者性を高めるため、「グローバルライフ」（詳細は後述）および、カナダ校外学習を開発した。総合学科高校は、1 年生で「産業社会と人間」を全員が履修し、2・3 年次の時間割を自ら作るのが特徴である。1 年次でグローバルイシューに生徒全員が触れ、海外校外学習を経験することで、自己のキャリア選択に「グローバル」な視点が加わることを期待している。SG クラスは、英語を学ぶだけでなく、世界の言語の多様性を学ぶために「英語＋1 言語」をキーワードに、選択制のインドネシア語講座を開講することとした。また、SGH5 年経過後を見据え、平成 30 年度入学生から、SG クラスの生徒を対象とした「グローバルパスポート」（総合的学習の時間）を開講し、グローバル企業や社会起業分野で活躍している社会人、身近なロールモデルとしての卒業生や留学生との交流、社会問題の解決を具体的な形にしていくための第一歩として、ビジネスプランコンテストに参加することとしている。

2 年生では、「T-GAP（つくさかグローバルアクションプログラム）」を生徒全員が履修している。これは、グループ（1 チーム 4～5 名程度）により、各班でグローバルな社会課題を設定し、具体的にその解決活動に取り組むものである。SG クラスの生徒は、さらに「高校生国際 ESD シンポジウム」への参加を必須とし、国際会議の運営に携わることにしている。また、選択制の SGH 科目として「国際フィールドワーク」を開講し、実際に海外でインドネシアの高校生とフィールドワークを実施する機会を提供している。

3 年次では、全員が個人で課題を設定し「卒業研

究」に取り組んでいる。とくに、SG クラスでは「グローバルなキャリア選択」を将来にわたって実現するために、海外での就職を視野に入れた進路選択や留学を実現できるように促している。

「グローバルライフ」開発における教科間連携

SGH の主要な開発単位のひとつが、1 年生全員が履修する「グローバルライフ」である。これは、家庭科科目「家庭基礎」をベースとしつつ、複数の教科が連携して内容の開発と授業実践を行っている（平成 30 年度は、家庭科、地歴公民科、農業科の教員で授業を実施）。

日本がグローバル化した社会に対応していくためには、生徒全員がグローバルイシューに対して「当事者意識」を持つことが重要であると本校では考えている。一方で、グローバルな課題は自分とは関係ない、あるいは遠い世界で起こっていることと考えている生徒も多いと考えている。この仮説のもと、日常生活がすでに多くのグローバルイシューとつながっており（例えば、食品、化粧品、洗剤など日常生活で欠くことのできないものの多くが、熱帯で生産されているパーム油が用いられており、それが森林減少やそれにとまなう生物多様性の減少や地球温暖化の原因とつながっている等）、誰もがさけて通れる問題ではないと、身につまされながら当事者性を育成できる授業を開発している。その際に、複数の教科が連携することで授業内容に多様性を持たせ、効果があがるようにしている。本校では、2 年次 T-GAP、3 年次卒業研究（詳細は後述）で生徒自らが課題を設定して探究活動に取り組むが、テーマ設定のきっかけにグローバルライフをあげる生徒が複数おり、授業が効果をあげていると考えられる。

SDGs を軸とした各教科の見直し

各教科は、SGH 開発科目と有機的に連携が取れるように、SDGs との関連の中で学習内容の見直しや整理を進めている。例えば、保健の授業での学びを SDGs17 の目標で示したり、家庭科の学びを SDGs12 番の「作る責任、買う責任」の視点で見直している。学校設定教科「国際科」の「国際社会」の授業では、「学校 SDGs」を実践し、校内で身近にできる「SDGs 実現」に向けたスモールプロジェクトを実施している。農業科の授業では、

SDGs14、15番を実現するために地域レベルで実践できることを考え発表を行っている。このような形で、各教科での取り組みも SGH と有機的につながるように工夫している。

全員で取り組む課題研究

課題研究（校内名称：卒業研究）は、3年次の全員が個人テーマを設定して取り組んでいる。2年次の全員履修の「T-GAP」とあわせて、全員が2年間にわたって取り組んでいる。3年次での指導体制は16名の教員が1名当たり10名の生徒を担当し、ゼミ形式で運用している。さらに、担当教員だけでなく、全教員に相談できるようにしており、さらに外部連携も推奨している。このように、本校の課題研究は、生徒および教員が全員関わる形で運用されているのが特徴である。

管理機関と連携したエビデンスの収集と分析

SGHの成果に関するエビデンスの収集は、管理機関である筑波大学附属学校教育局（以下、局とする）と連携して実施している。具体的には、局の開発した「国際的資質尺度」により、全生徒の経年変化をとらえている。この尺度によるエビデンスの収集は、SGH以外の国際教育プログラムとの比較や、他のSGH校との比較も局との連携で可能となる。

また、SGH指定前後の英検取得者の推移も集計を行っている。指定前は英検2級の合格者は1ケタ台で推移していたが、指定後は、50名前後の合格者を出している。また、準1級合格者も複数出ており、英語の運用能力は確実に向上している。さらには、本校の特色のあるインドネシア語においても「インドネシア語検定D,E級」合格者が出ており、「英語+1か国語」が実現しつつある。

さらに、国立大学附属高校として、卒業生の動向も調査を始めており、SGH指定初年度の卒業生（2018年6月現在大学4年生。SGH国際フィールドワークに参加）では、日本語パートナーズ事業（国際交流基金の事業）で、アセアンの国で日本語教師として活躍を始めている生徒もでていいる。さらに、高校時代に、インドネシアやフィリピンの姉妹校へ1年間の海外留学に行く生徒もでていいる。「国際的資質尺度」や英検合格者の推移による量的変容を調査するとともに、卒業生を中心とした行動変容

をおっていく質的変容も今後、継続していきたい。

国際シンポジウムによる成果の普及

本校では、SGH指定前の2012年から「高校生国際ESDシンポジウム」を開催し、インドネシア、タイ、フィリピン等の国から高校生を招聘し、ESDをベースとした探究学習成果を共有する国際交流を継続している。SGH指定後には、このシンポジウムと合わせて、「全国SGH校生徒成果発表会」を開催し、毎年20校程度のSGH校が発表を行い、国内外の高校生が日ごろの学習成果を基にした交流を行う場所を提供している。課題研究のテーマは、各校で様々のため、発表に統一感を持たせることが難しい場合がある。また、海外の高校が参加する場合はなおさらである。そこで、本校のシンポジウムでは「SDGs」をキーワードに、各学校の探究活動の成果が、SDGsの17の目標のどれにあたるか（複数に該当する場合もある）を提示してもらい、持続可能な世界の構築のために、どの分野で貢献しているかを提示してもらっている。

2017年には新たなチャレンジとして、インドネシアの首都ジャカルタにおいて、インドネシア政府環境林業省の協力のもと、「第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング@ジャカルタ」を開催した。ここには、本校だけではなく、日本から中部大学春日丘高等学校、大阪府立泉北高等学校も参加し、SGH校が3校参加した。また、インドネシアから5校が参加し、SGHの成果を国内だけではなく、インドネシアにおいても普及をおこなった。本校は「オープンプラットフォームスクール」を目指しており、地域や世界の人々が国や地域、年代を超えて学びあう場所を提供することを目指している。



第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング@ジャカルタ
(2017年8月10日 於：インドネシア環境林業省)

これは、国立大学附属高等学校としての責務であるとも考えている。今後とも、本校のネットワークを生かしたSGHの成果普及に努めていきたい。

アセアンの大学との高大連携

本校は、管理機関である筑波大学、とくに大学の世界展開力事業である「AIMS (ASEAN International Mobility for Students)」と連携して、SGHプログラムを展開している。毎年、年に数回、筑波大学に留学しているアセアン各国の留学生が来校し、文化交流だけではなく、生徒のアセアンや日本との比較研究など探究活動に対して、英語によるやり取りの中、直接、フィードバックを得ることができている。

さらに、高大連携を国内の大学との連携にとどめず、筑波大学が国際連携協定を締結している、ボゴール農科大学、フィリピン大学、カセサート大学とも連携を進めている。海外における課題研究活動に関する支援を中心としているが、ボゴール農科大学附属高校では将来教職を希望している筑波大学生の「海外教育実習」を試行するなど、様々な分野における連携を進めている。



アセアン各国の留学生が参加したT-GAPポスターセッション

協働型「国際フィールドワーク」を国内外で

最後に、本校の特色ある取り組みの一つである、

インドネシアの姉妹校2校と実施している「協働型国際フィールドワーク」についてまとめる。

本校のSGHでは、申請当初からSDGsをキーワードとしている。SDGsでは、「先進国と途上国が普遍的に協働し目標を達成する」ことが述べられている。これまで先進国と開発途上国は、支援一被支援の文脈で語られることが多かったが、今後は、世界のパラダイムも大きく変化してくるであろう。現在の高校生が社会の中心として活躍するころには、人口減少や労働者人口の減少がさらに進んでいる日本は、まったく違った社会になることが予想される。本校の開発している協働型国際フィールドワークは、新たなパラダイムに対応できる生徒の育成をめざし、バックグラウンドの違う高校生が国や地域をこえチームを組んで実施している。現在は、インドネシアでインドネシアの高校生と連携して実施しているが、将来的にはフィリピンやタイで同様のフィールドワークを実施したり、複数の国の生徒が参加するフィールドワーク、さらにはインドネシアで実施しているフィールドワークを同じ枠組みで日本の農村部で実施できないかと考えている。このような多様な経験を高校段階で提供することで、次代を担うグローバル人材を育成できると考えている。SGH指定5年間で得た国内外のネットワークや経験を生かした新たな取り組みを今後も展開していきたい。



インドネシアの農村部で聞き取り調査を行う本校の生徒とインドネシア姉妹校の生徒（インドネシア西ジャワ州チボダス）